朝鮮司訳院の清学書のハングル対音の性格について

菅　野　裕　臣
神田外語大学

1.1.　朝鮮王朝の司訳院は朝鮮の隣接諸国の言語を学習し，これらを活用する機関であり，主として四学ー漢学，清学，蒙学，倭学ーを扱った．このうち清学書として以下のものが知られている．

「八歳兒」(1777)	読本	刊本	
「小兒論」(1777)	読本	刊本	
「三譯總解」(1777)	読本	刊本	
「清語老乞大」(1765)	読本	刊本	
「同文類解」(1748)	辞書	刊本	(満洲字無)
「漢清文鑑」(1771？)	辞書	刊本	

以下にハングルはローマ字転写（河野六郎方式,『河野六郎著作集』1，平凡社，東京，1979，11ページ参照）することにする．

1.2.　漢学書，清学書，蒙学書のある種の資料にはハングル対音になんらかの diacritical mark（識別記号）の付されたものがある．このうち清学書について見ると，以下のものが見られる．

（1）清学書：「同文類解」,「漢清文鑑」の満洲語注釈部分．
　ハングル対音の右に付されるもの: ˙ , ˩
　ハングル対音の左に付されるもの: ˙

（2）蒙学書：「蒙学類解」の蒙古語，ハングル対音の右に付されるもの: ˙ , ˩ , ˆ , ˇ , ˙ : 等．

これらのうち次のものが共通している．r˩ (音節頭)，r˙ (音節末)．前者は音節頭の l，後者は音節末の l を示すものだが，語頭の l の場合 r に記号˩が付されないのは，満蒙両言語では語頭に r があらわれないから，敢えて識別記号を付す必要がないわけである．このことは司訳院の訳学書あるいは訳官たちだけが異なった言語，特に満蒙両言語にまたがって相互になんらかの関係を持っていたことをうかがわせる．

1.3.　清学書と蒙学書のハングル対音の研究史を概述する．

満洲語のハングル対音をもっとも早く扱ったのは池上二郎(1950－1951, 1954/1997)であるが，「漢清文鑑」(小倉進平旧蔵本，現東京大学蔵)の満洲語の見出語部分と「八歳兒」(現ソウル大学奎章閣蔵本の写真)，そして「清語老乞大」と「三譯總解」は京都帝国大学刊『朝鮮司訳院日満蒙語学断簡』収録部分のみに依拠しているために，ハングル対音の識別記号にはほとんど言及していない．しかし「蒙語老乞大」のハングル対音部分をも部分的にあつ

かっている.

閔泳珪(1956)は漢語音の表記に関してハングル対音の識別記号が漢語音の満洲字対音のハングルへの転字であることを述べているが,満洲語のハングル対音にはほとんど言及しなかった.

小澤重男(1961)は「蒙語類解」(東京外国語大学蔵写本)のハングル対音を扱ったが，識別記号が発音のちがいを表示したものと考えた.

菅野裕臣(1963)は「捷解蒙語」(東洋文庫本)を扱う過程で「蒙語類解」(東京外国語大学蔵本)にも触れ，1)ハングル対音の識別記号がそれ自体としては蒙古語の転音ではなく，蒙古字の転字をめざしたものであること，2)その結果としてハングル対音が蒙古語の発音をも表示していることを述べた.すなわち識別記号はそれのないハングル対音との発音の差異を示すのではなく，蒙古語原綴りの差異を示すものだとした．例えば r˩ は第 2 音節以降で r と区別された l を示しているのであり，語頭に r が立つことはない蒙古語でははじめから語頭では l と示すための識別記号は必要がなかったのである．かくして小澤重男(1961)が述べているように蒙古語 'iᵃ kə <大きい> の 'iᵃ は i と区別されるという発音を示すものではなく，普通の綴り i（発音も i）と区別される綴り yi (発音は i)を示したものである(yeke). 菅野裕臣(1975)は金炯秀(1974)が朝鮮蒙古語文献をローマ字転写するに際し完全にハングル対音を無視する態度を強く批判し，「蒙語類解」のハングル対音と識別記号をより全面的に記述した．これは鄭提文(1990)により一部の修正を含めてほぼ全面的に承認された.

成百仁(1989)は池上二郎(1950－1951. 1954/1997)よりもさらに「漢清文鑑」の満洲語注釈部分および「同文類解」のハングル対音と識別記号を包括的に扱い，やはり蒙学書における表記と同じく，これらが転音ではなく転字であることを明らかにした.

ここにおいて司訳院訳学書中のハングル対音と識別記号の転字性がほぼ確定したのであり，鄭光(1978)が「李朝語にはない音韻の発音を転写する為の，言い換えれば，訓民正音の二十八字母にない音韻の発音に対しては，多くの区分符(Diacritical mark)を用いて<u>発音を転写した</u>のである」(下線は菅野のもの)と理解していることが不充分な，あるいはまちがいであることは明らかとなった.

<u>2.1.</u> ところで清学書と倭学書には学習者がハングル対音に(倭学書の場合ひらがなにも)筆の頭で朱円(時折黒円)を施した本が数本ある.

清学書は，筆者の調査した限りでは，朱円有無の状況は次表のとおりである.

	「八歳兒」	「小兒論」	「三譯總解」	「清語老乞大」
既調査 朱円有	ソウル大学古図書 3900－1 駒沢大学濯足文庫	ソウル大学奎章閣 2136[1] 駒沢大学濯足文庫		大英図書館[2]
既調査 朱円無	ソウル大学奎章閣 1471[2]	ソウル大学奎章閣 3234[2]	ソウル大学奎章閣[1][2] 駒沢大学濯足文庫	駒沢大学濯足文庫[3] 東京大学小倉文庫[1] パリ東洋語学校
未調査	大英図書館	大英図書館 パリ東洋語学校	大英図書館 パリ東洋語学校	

[1] 延世大学校(ソウル)影印　[2] 弘文閣(ソウル)影印　[3] 太学社(ソウル)影印

2.2.　「八歳兒」と「小兒論」はソウル大学蔵本と駒沢大学(日本東京)蔵本とで朱円の施されたハングル対音が完全に一致する.朱円の施されたハングル対音を含む単語を列挙すると以下のとおりである(朱円が関与していると思われる綴りに下線を付す：なお，小:「小兒論」；八:「八歳兒」).

(1) l(音節末): boljoca(小), elhe(八), golmin(小), jilgan(小,八), julgei(小, 八), niyalma(小,八), selgiyefi(八), ulhire(八), ulhū (小), ulhūma(小)

(2) k (音節末): dekdefi(八), sektere(小)

(3) k (u の前): gekuhe (小)

(4) g (u の前): guwelembi(八), guwendere(小), guwenderengge(小), gurun(小, 八), menggun(八), ninggude(小)

(5) h (u の前): hude(小), untuhun(小), weihun(八), wesihun(八)

以上のほかに「小兒論」には次のものがある.

(6) jiyang

(7) nio, niowanggiyan, niôngniyaha(ハングル表記　nyungnyaha)

なお「小兒論」,「八歳兒」ともに朱円の施されるハングル対音の原則は一定であり，ひとつの例外も見られない.

2.3.　「清語老乞大」は 2.2.の(1)～(5)に関してさらに豊富な例が見られる.宋基中(1998: 9－10)は「7) ロンドン本の円表示」という項目で 2.2.の(4),(5),(1)のほかに次のものを挙げている.

(8) oo (ハングル対音 ao): coohiyan(ハングル：cyaohyan), liyoodung (ハングル：ryaodung)

(9) g'(ハングル対音 g): g'ao(ハングル: gao)

筆者の調査ではさらに次のものが見られる(ローマ数字; 巻数. 巻—丁数—表(a), 裏(b)—行数).

(10) t(ū の前)(ハングル対音 d): tūci(ハングル: duci)Ⅶ14a2

(11) p(ハングル対音 p): fempi Ⅷ17a6, 18b2 ; pun ; pusêli(ハングル: pusɯ li)Ⅶ18b1,3

(12) iyu(ハングル対音 yuə): yargiyūn Ⅷ3b3 ; hūncihiyūn Ⅰ22a1

(13) š(ハングル対音 sya): aššaburakū Ⅴ16a3

(14) wen(ハングル対音 un): wen šu Ⅵ1 a2

(15) siyan(ハングル対音 syan): Ⅴ665(2), Ⅶ7a1,9a6

(16) ja(ハングル対音 jya): dêngjan(ハングル: dɯ ngjyan)Ⅱ11a4,5

(17) i(ハングル対音'i): ini Ⅱ26a5, i jeo Ⅰ7a3

(18) ii(ハングル対音 i): lii(ハングル: ri)Ⅰ22b1, Ⅴ4a5,7a2

(19) di(ハングル対音 di): dingsê(ハングル: dingsɯ)Ⅶ21a1; diyan(ハングル: dyan) Ⅴ1a6, 2a6, 3b3, 4a4, 9a5, 10b4, 11b1,2,4, Ⅵ13a5, Ⅶ2a3, 6a2; (朱円無)Ⅰ13b5, 23b5, Ⅳ22b5, 23a1

2.4. 2.2., 2.3.の(1)〜(19)について考察を進めよう.

まず気づくことは, これらの朱円の施されたハングル対音は概して「同文類解」,「漢清文鑑」(以下にそれぞれ「同文」,「漢清」と略す)の識別記号の付されたハングル対音とほぼ一致するという事実である.

(1)〜(5)はほとんど例外がない. これらが(1) r と区別される l, (2) 男性字の k と区別される女性字の k, (3), (4), (5) kū, gū, hū と区別される ku, gu, hu を示したことはまちがいない.

(10)は「同文」,「漢清」とも完全に一致するが, これについてはすでに成百仁(1984 : 411−412)が言及している. すなわち「漢清」における漢字による切音に依拠して dū と読み, du と区別しようとしたものである.

(7) nio(「同文」なし;「漢清」・nyu Ⅷ67b2), niowanggiyan(「同文」・nyoanggyan 上 5b9, 下 26a1 ;「漢清」・nyuanggyan Ⅹ65a6) niôngniyaha(「同文」nyungnyaha 下 9b8 [識別記号なし];「漢清」・nyungnyaha ⅩⅣ14b5). 成百仁(1984 : 395−403)参照. すなわち io, iô は iyo 等と区別される綴り io を示すものであろう.

(6), (15)は ja, ša と区別される綴り jiya, siya を示したものである. しかしながら(16)の朱円がなにを意味するのかが不明である.

(13)は「同文」'asɯ syambi (sɯ ・)上 29a;「漢清」'asisyambi (・si)Ⅶ44b7 とあり, ・sya(=「同文」sɯ ・,「漢清」・si)が š を示すことは明らかである.

(9)はこれと同じ単語を「同文」,「漢清」に求めたいが,「同文」上 42a8, 上 43b5 gausɯ bidhe (gau・), 下 23a10 gan sərə (gan・, rə˩)(鋼鐵)があり, 普通の g と区別される満洲字 g'を示すことはまちがいない.

(12)「同文」上 31a10 には saiyuən[識別記号なし](好麼)があり, 一致しな

いが，恐らく yuwe とは区別される yū を示したものであろう．ただし，「清語老乞大」Ⅶ20b5 の yūn nan(ハングル'yunnan)(雲南)は yu と区別される yū を示したものか？

(10)は「同文」下 32a cyoohyan，「同文」下 38a ryoodung 等に対応するが[ともに識別記号なし．また「漢清」には対応の単語を求められない]，恐らくは発音 ao と一致しない綴り oo を示したものであろう．

(14)は「同文」上 50a に'wən[識別記号なし]という表記がある．恐らくは発音 un と一致しない綴り wen を示したものであろう．

(18)は「同文」，「漢清」に例を求め得ないが，発音 i と区別される綴り ii を示したものだろう．しかし(17)「同文」下 51a に ini，「漢清」Ⅷ58b6 注釈部分に ini[ともに識別記号なし]を見るに，(17)の朱円はなにを示すのかが不明である．

(19)の diyan は「同文」上 34a に「殿 dyan[識別記号なし]」があり，dingsê は「同文」上 55a に dingsɯ ，「漢清」XⅢ15b8 に dingsɯ [ともに識別記号なし]がある．しかも diyan は巻一～四では朱円がなく，巻五以降では朱円が施されている．敢えて言えば，diyan の yan ではなく di の部分の満洲字綴りの右に点を付すべきところを示したのかもしれないが，dingsê の ding の部分は朱円を施すべき必然性が見られない．

(11)は「同文」でも「漢清」でも識別記号なしに書かれる．その理由はこの 2 つの辞書は f を示すためにハングル v を用いるという点で，f のためにハングル p を用いる他の清学書とは異なるからである．p は f と区別される綴り p を示すものである．

以上のとおり清学書の中での表記は細部にわたっては必ずしも一致しないこともあるが(例えば「同文」ではしばしば(2) k であるべき文字に識別記号の付されない例が見られる)，概して朱円も識別記号も綴りのちがいを第一義的に示しているという点で一致しうる．どういうわけか音節の頭(第 2 音節以降)での r と l とを区別しわける努力を清学読本 3 種は怠っている．

2.5. 朱円は多くの場合ハングル対音のハングル 1 字の上に施されるが(ryao, hu のように)，「清語老乞大」ではハングル 1 字の左に施されることがある(巻一 cyao，巻三 'i のように)．特に巻一，二，三でこの傾向が著しい．

この朱円はしばしば識別記号と同様に当該のハングル対音のどの部分に関連したものかがあいまいである．しかし「小兒論」と「八歳兒」を詳細に見る時は，2.2.の(１)と(２)の朱円は終声字寄りに施され，(3)～(5)の朱円は初声字寄りに施されていることがわかる．しかもソウル大学古図書の「八歳兒」では r 終声字だけは小さめの朱円を施していることがわかる．

満洲字における圏点(すなわち一種の識別記号)が単音字につけられたものか，音節につけられたものかは議論の余地のあるところだが(多分後者の可能性が強いと思われる)，「同文」，「漢清」における識別記号の位置からも

((1)はr終声の右に,(2)はg終声の左に。を付し,(3),(4),(5)の場合はk,g,h初声の左に が付される),また「小兒論」,「八歳兒」の朱円の位置からも,(1)〜(5)は子音字に関連したものと考えることができる.そう考えることにより司訳院清学訳官が音節ku, gu, huにおける子音字k, g, h(女性字)が音節kū, gū, hūにおける子音字k, g, h(男性字)とは異なるという認識を持っていたこと,それ故に男性字たるk(音節末)から区別される女性字(音節末)に特に識別記号や朱円を施したのだということを知るに到る.(10)の音節tūに対するハングル対音duに付された識別記号や朱円は男性字に対する女性字dというとらえ方だったかもしれないのである.

結局のところ(1)〜(5),(10),(11)は子音に関するもの,(13)はハングル1字(1音節)が実は1子音相当のもの,(6),(7),(15)は子音+母音に関するもの,(10),(12),(18)は母音に関するもの,(14)は音節あるいは母音に関するものと理解することができよう.

3. 訳学書のハングル対音の識別記号と朱円を考察することにより,おおよそ次の点を指摘しうるであろう.

(1) 訳官たちは音節の境界に非常に関心があった.清学書と蒙学書のある種の識別記号は綴りと発音の不一致(2音節字,しかし1音節の発音)を示している(例えばja(ハングル: jya)に対して清学書の ·jya,蒙学書のjya。はともに綴りjiyaを示している).

(2) 訳官たちは他言語の文字とハングルとの不一致,すなわち特殊な綴り,あるいは特殊なハングル対音に注意を払った.主としてこの目的で識別記号と朱円が用いられた(発音の表示は第二義的なものだった.恐らくはハングル表示それ自体が標音と認識されていたのだろう).

(3) 清学書や蒙学書では,満洲人や蒙古人の認識とは関係なしに,訳官たちは,ハングルの構造に似て満洲語や蒙古語の音節を子音字と母音字とに分解して理解していたと思われる.例えば満洲語の音節gu / gūは子音のちがいと認識され(すなわち後者のgの部分に·が付された.実際は子音字も母音字もそれぞれ異なる).蒙古語の音節γu / güでは母音のちがいと認識された(すなわちüの部分に、が付された.文字は子音字γとgが異なり,母音字u / üは第1音節以外では同じである).

(4) この朱円の存在は司訳院で他言語の文字による本文を読み,かつハングル対音を他言語の文字に移しかえる努力をしたことのあかしと言える.また朱円の施し方は決して個人の恣意によるメモではなく,一定のきまりを持っただろうと思われる.

参考文献

池上二郎(1950－1951, 1954/1997),満洲語の諺文文献に関する一報告,「東洋学報」33巻2号(1950－1951),97－118ページ;36巻4号(1954),57－74ページ(『満洲語研究』,

1997, 3－42 ページに再録).
小澤重男(1961), 中・韓・蒙対訳語彙集「蒙語類解」の研究(1)—朝鮮語と蒙古語との若干の音韵対応にもふれて—,「東京外国語大学論集」8.
菅野裕臣(1963),「捷解蒙語」のモンゴル語について,「朝鮮学報」, 第 27 輯, 65－93 ページ.
————(1975), 書評　金炯秀著『蒙学三書研究Ⅰ』,「朝鮮学報」, 第 74 輯, 167－178 ページ.
金東昭(1982), "改訂版　同文類解　滿洲文語　語彙", 暁星女子大学校　出版部, 77pp., 大邱.
金炯秀(1974), "蒙学三書研究Ⅰ", 螢雪出版社, 571pp., 大邱.
閔泳珪(1956), 解題, "韓漢清文鑑", pp. 1－13, 延禧大学校, 서울.
朴恩用(1989), 韓漢清文鑑　語彙索引. 滿韓篇, '韓国伝統文化研究', 第 5 輯, pp. 294－432; 第 6 輯, pp. 127－275.
朴昌海, 劉昌惇(1960), "韓漢清文鑑　索引", 延世大学校, 101pp., 서울.
成百仁(1984), 訳学書에 나타난 訓民正音 使用－司訳院 清学書의 만주어 한글 표기에 대하여, '韓国文化', 5, pp. 21－63 (성백인, "만주어와 알타이어학 연구", 태학사, 서울, pp. 367－422 に収録).
成百仁(1991a), 三訳総解, "韓国 民族 文化 大百科 事典", 11, 서울.
———(1991b), 小児論, "韓国 民族 文化 大百科 事典", 12, 서울.
———(1991c), 清語老乞大, "韓国 民族 文化大百科 事典", 22, 서울.
———(1991d), 八歳児, "韓国　民族文化　大百科事典", 23, 서울.
宋基中(1998), "清語老乞大"解題, "清語老乞大", 弘文閣, p. 1－14, 서울.
鄭光(1978), 司訳院訳学書の外国語の発音転写に就いて,「朝鮮学報」, 第 89 輯, 107－116 ページ.
鄭堤文(1990), "「蒙語類解」의 몽고어에 대한연구" (文学博士学位論文), 176 pp., 서울.

[付記]　これは 2000 年 9 月 11 日中国内蒙古自治区海拉爾市で行なわれた首届国際通古斯語言文化研討会で発表したものであるが, 中国社会科学院民族研究所の朝克教授の承認を得てここに日本語文のものを発表するものである.

«要旨»

「朝鮮司訳院の清学書のハングル対音の性格について」

О характере корейской транслитерации в учебниках маньчжурского языка, изданных корейским средневековым переводческим учреждением Саёгвон в Династии Ли

КАННО Хирооми

Университет иностранных языков Канда

Автор, исследовав всякие примеры диакритических знаков для корейской транслитерации в учебниках маньчжурского языка, изданных корейским средневековым переводческим учреждением Саёгвон в Династии Ли, во всех текстах, сохраняемых в Японии и Южной Корее, в сопоставлении с диакритическими знаками в учебнике монгольского языка, указывает на следующие пункты:

Во-первых, корейские лингвисты в Династии Ли интересовались границами между слогами. Некоторые диакритические знаки в учебниках маньчжурского и монгольского языков указывают на несоответствие между буквами и произношением (транслитерация двухсложная (jiya), но произношение односложное (jya)).

Во-вторых, корейские лингвисты пользовались диакритическими знаками для корейской транслитерации специальных букв других языков, которая сама по себе не обозначала произношение. Вероятно они думали, что транслитерация сама по себе служила обозначением произношения.

В-третьих, корейские лингвисты вероятно считали маньчжурское и монгольское обозначения слогов состоящими из согласгого и гласного вроде корейского слога. Например они отметили диакритическим знаком для согласного маньчжурский слог «gü» в отличие от «gu» и диакритическим знаком для гласного монгольский слог «gü» в отличие от «γu».

В-четвертых, исходя из существования определенных правил таких диакритических знаков общих для разных текстов мы можем соображать, что они не были произвольными.